

新教育課程における漢文指導法の工夫

秋元達也

一 はじめに

今回、表記のテーマで提案させていただく機会を得た。現場に身を置く私は、新課程の意義・目的は理解しているつもりであるが、目前の大学入試に気を取られ、従前の訓古注釈を中心とし、かつ句法の暗記に重きを置いた漢文の授業に終始している状況であった。そこで「提案」という重要な立場を利用していただき、これからの私の行き方を模索する意味でも、以下ご紹介する実践を試みてみた。今回は、その時の提案及び協議の内容を踏まえながら、あれから半年近く経過した現在の時点での私の考えも折り込み、述べさせていただく。

二 基本的な考え方

できるだけ多くの時間、生徒たちに漢文を読み味わわせたい、これが正直な気持ちである。しかし学校週五日制の

現実化に伴い、その願いの実現は不可能になりつつある。実際は週に一時間の確保がやっとの状況であり、その中でいわゆる「新しい学力観」に基づく学力育成を図るためにはどのような工夫が必要なのであろうか。以降、課題点を列挙しながら漢文指導の新たな工夫の可能性・ポイントについて述べてみたい。

1. 自ら学ぶ意欲を育成するために

いわゆる「新しい学力観」の根幹の一つをなすものが、この「自ら学ぶ意欲」の育成であるが、問題は、直接的に教授することが不可能な「意欲」をいかにして身につけさせるかにある。

ところで日常生活における私たちの読書を考えてみた場合、私たちが何かの本を読もうとする時に、そこには必ず何らかの興味・関心に基づく目的意識が働いているはずである。ということは、「意欲」が生じるためには「興味・関心」と「目的意識」が必然的な条件となるわけである。学習指導においてもこの原則はもっと重視されるべきではな

いか。即ち、一つの学習において、学習者の興味・関心に基づく目的意識（学習する必然性）をしつかりと持たせることがその学習に対する意欲の育成につながり、さらにその積み重ねが、学習全般に対する普遍的な意欲の育成につながると言えるのではないか。したがって、意欲育成のための最重要点は、どれだけ学習者にとって切実な学習目標（学習課題）を設定し得るかにあると考える。そしてこのことは、漢文を教材としてではなく文学として読もうとする態度育成にもつながっていくはずである。

2. 言葉の力を育成するために

漢文の授業は、あくまでも国語の授業の一部として行われる。したがって、その目的は言語の力の育成であり、1で述べた意欲の育成もその延長線上にあるべきものである。最終的には読書意欲や表現意欲をしつかりと育成することが、生涯を通しての言葉の学び手の育成につながるのであるが、日々の授業においては、その学び手となるに必要十分な「読み」の力、表現する力を育成していかなければならない。漢文において、その指導の中心となるのが句法の指導となろう。

しかしこれを前面に押し出しすぎることは、漢文そのものの面白さを減少させ、学習者に漢文嫌いを生み出す結果にもなりかねない。やはりそこには、句法を学ぼうとする意欲を持たせる、即ち学ぶ必然性を感じさせるような授業計画が必要となってくる。したがってこの問題は1の意欲

育成の問題と切り離して考えるべきものではなく、あくまでも一つの目的を持った学習の中で必然の一過程として育成を図らなければならないと考える。

3. 社会や時代に対応する力を育成するために

二十一世紀を生きる青年の育成を担う私たちにとって、特に情報化社会と国際化社会に対応する力を育成することは避けては通れない課題である。国語科もその例外ではない。コンピュータをはじめとする情報機器の発達により、私たちは過度とも言える情報量の中からの確かな判断によって情報を選択し、処理しなければならなくなっている。その能力を育成するためには、授業において、できるだけ多くそのような「場」を設定することが必要となるだろう。しかし、あまりにも情報を重視しすぎると、生きる核たる「自己」（確固たる価値観に基づく判断力や、決してデジタル化できない情緒・感情など）を失う危険性も否めない。それらの面を育成するのも、情報化社会に対応する国語科の重要な役割であると考えられる。

国際化社会への対応としては、他国について論じた言語教材を通し、読解過程で自国と他国との相対化を行わせる行き方などが考えられる。これを「外向的指導」として定義する。しかし、相対化するためには、相対化しうるだけの読解力とともに、より深い自国についての絶対的認識や理解が必要とされるだろう。そのための指導も欠かすことはできない。これを「内向的指導」とする。古典領域の作品

は、この「内向的指導」に絶大な力を發揮するはずである。さらに漢文は「中国の古典」であるという面と「日本語文化の根底の一つ」という面を生かせば、「外向的指導」と「内向的指導」が同時に行なえる可能性をも持っている領域であると考えられる。

以上の課題を今回は主題単元学習の方法を用いて解決を試みることにした。さらにそこに現代文・古文の読解作業も含ませた「総合化」の観点も加えて、漢文が連続した言語文化の一部であることを認識させることによつて漢文学習の意義を実感させ、同時に時数不足を少しでもカバーできるのではないか（授業時数不足は現代文・古文も同じ）との目標も設定してみた。

三 授業の実際

1. 単元銘「真の友情とは」

2. 単元設定の理由

現在、大きな社会問題となっている「いじめ」であるが、その根底には他人への思いやりの欠如がある。社会生活の根源の一つである友情をテーマとした文章を読ませることにより、社会と自己のあり方を考えさせる契機とさせ、かつ課題解決学習を中心とすることで漢文学習の意義を認識させたい。そして同時に今後の学習に対する意欲を高めた

い。

3. 教材 全体学習教材

発展学習教材

『刎頸の交』

『管鮑の交』

『水魚の交』

『論語』

『漢詩（五首）』

『走れメロス』

『友情』

4. 授業実施クラス 出水高等学校三年六組

5. 授業実施時期 平成七年五月下旬～七月

基本的に毎週一時間（計一〇時間）

6. 単元の指導目標

①「友情」を主題とした様々な文章を読むことを通し、自己と社会の関わりについての認識を深化・拡充させる。

②主題をもとに漢文を読ませることを通し、漢文学習の意義と意欲を身につけさせる。

③漢文を読み味わう力と方法を身につけさせる。

7. 学習目標

様々な作品を読んで「友情」とは何かを定義し、そこに現代社会の諸問題を解決する糸口を見出そう。

8. 授業の流れ（次ページ参照）

9. 授業の分析

I 導入段階

「いじめ」についてはほとんどの生徒が関心をもっていた。その原因と対策について発表させたところ、ほとんどの生徒が「友情」とか「お互いの思いやり」という表現を用いたので、「友情」というテーマにはすんなり入っていか

次時	入 入	尋 尋	本 本	展 展	展 展	開 開	開 開	展 展	ま と ち め	
1	<p>・「はじめの要因について考える。」</p> <p>○字で定義を築きあげよう。</p> <p>・「友情を二〇〇字と一〇〇字で定義を築きあげよう。」</p> <p>・「自分の考えを的確に表現するための考えを比較し、相対的に自分の意見の位置を確認する。」</p> <p>・「問題点を明確に把握する。」</p> <p>・「友情は互いの利害が一致したところに成立するか、それには無関係に成立するか」</p> <p>・「今後の学習計画を把握する。」</p>	<p>・「前時の内容の確認をする。」</p> <p>・「例題の文における友情はどのように定義できるか読み取る。」</p> <p>・「時間（七分）で正確に二回戻し読む。」</p> <p>・「七分という時間は、ある程度意欲をもち読めば、三分三〇秒あれば一回は読めるとの予測からである。」</p> <p>・「後の展開と内容把握に焦点を絞る。」</p> <p>・「ここから後のグループ学習のためのモテルとなる内容となる。根拠を本文に求めさせる。」</p> <p>・「字数的制限二〇〇字。抽象的にならなように具体的な事項を折り返させてまとめさせる。」</p>	<p>・「重要句法の確認」</p> <p>③ 内容の把握</p> <p>④ 「友情」の定義をする。</p>	<p>・「登場人物の発言を逐し、それを把握する。」</p> <p>・「例題の文における友情を、」</p> <p>・「字数的制限二〇〇字。抽象的にならなように具体的な事項を折り返させてまとめさせる。」</p>	<p>・「基本学習で学んだ方法を用い、グループでそれぞれの担当作品を研究し、友情についての分析を行う。」</p> <p>・「担当作品は抽選で決定し、手引きを配布するが、作品の性格が異なるため指導者は常に机間を巡視し指導・助言を行う。」</p> <p>・「討論担当の二グループには、この時間を利用して討論のための材料を集めさせる。」</p>	<p>・「各グループの研究成果を発表しあい、友情について考えるための視点を傳る。」</p> <p>・「この活動により学習者は多くの作品に接することになり、同時に友情料を得ることになる。発表は各グループに七分を割り当て、発表のためレジュメ及び発表原稿を作成させる。」</p>	<p>・「グループ研究発表会」</p> <p>・「グループの研究発表会」</p> <p>・「グループの研究発表会」</p>	<p>・「グループ研究発表会」</p> <p>・「グループ研究発表会」</p> <p>・「グループ研究発表会」</p>	<p>・「ここまで学習した作品の分析結果を踏まえ、最初に設定した課題について討論する。」</p> <p>・「ここまで学んだ作品を材料として用いさせるところで、指導目標の達成を図る。」</p>	<p>・「現代社会へのアピール」</p> <p>として、自分の「友情」についての定義を行い、それをもとにした現代社会へのアピール文を書く。</p>
2	<p>・「はじめの要因について考える。」</p> <p>○字で定義を築きあげよう。</p> <p>・「自分の考えを的確に表現するための考えを比較し、相対的に自分の意見の位置を確認する。」</p> <p>・「問題点を明確に把握する。」</p> <p>・「友情は互いの利害が一致したところに成立するか、それには無関係に成立するか」</p> <p>・「今後の学習計画を把握する。」</p>	<p>・「前時の内容の確認をする。」</p> <p>・「例題の文における友情はどのように定義できるか読み取る。」</p> <p>・「時間（七分）で正確に二回戻し読む。」</p> <p>・「七分という時間は、ある程度意欲をもち読めば、三分三〇秒あれば一回は読めるとの予測からである。」</p> <p>・「後の展開と内容把握に焦点を絞る。」</p> <p>・「ここから後のグループ学習のためのモテルとなる内容となる。根拠を本文に求めさせる。」</p> <p>・「字数的制限二〇〇字。抽象的にならなように具体的な事項を折り返させてまとめさせる。」</p>	<p>・「重要句法の確認」</p> <p>③ 内容の把握</p> <p>④ 「友情」の定義をする。</p>	<p>・「登場人物の発言を逐し、それを把握する。」</p> <p>・「例題の文における友情を、」</p> <p>・「字数的制限二〇〇字。抽象的にならなように具体的な事項を折り返させてまとめさせる。」</p>	<p>・「基本学習で学んだ方法を用い、グループでそれぞれの担当作品を研究し、友情についての分析を行う。」</p> <p>・「担当作品は抽選で決定し、手引きを配布するが、作品の性格が異なるため指導者は常に机間を巡視し指導・助言を行う。」</p> <p>・「討論担当の二グループには、この時間を利用して討論のための材料を集めさせる。」</p>	<p>・「各グループの研究発表を発表しあい、友情について考えるための視点を傳る。」</p> <p>・「この活動により学習者は多くの作品に接することになり、同時に友情料を得ることになる。発表は各グループに七分を割り当て、発表のためレジュメ及び発表原稿を作成させる。」</p>	<p>・「グループ研究発表会」</p> <p>・「グループの研究発表会」</p> <p>・「グループの研究発表会」</p>	<p>・「グループ研究発表会」</p> <p>・「グループ研究発表会」</p> <p>・「グループ研究発表会」</p>	<p>・「ここまで学習した作品の分析結果を踏まえ、最初に設定した課題について討論する。」</p> <p>・「ここまで学んだ作品を材料として用いさせるところで、指導目標の達成を図る。」</p>	<p>・「現代社会へのアピール」</p> <p>として、自分の「友情」についての定義を行い、それをもとにした現代社会へのアピール文を書く。</p>

た。

次に「友情」の定義をさせてみた。そこで提出された定義は異口同音に次のような内容であった。(以下、A〜Eの記号は生徒作品であることを示す)

A 「困っている時の友こそ真の友」というように、自分が窮地に立っている時、迷っていたりしている時に、最高の相談者、最高の協力者になってくれる者が真の友であり、本当に心を許しあうことのできる事が真の友情であると思う。

このように、友達を「自分の存在を支えてくれるもの」ととらえ、その間に成り立つ感情を「友情」であると定義したものである。そしてその感情の中身については言及していないものがほとんどであった。そこで、「君達は自分の利益になるかどうかという観点で友達を選ぶのだな」と揺さぶりをかけたところ、それを肯定した生徒は皆無であり、大多数の生徒は否定し、定義の論述内容との間に矛盾が生じた。以上のような経緯を経て、以降「友情」について考えていく観点として、「友情は互いの利害が一致したところに成り立つ感情か、それとは無関係に成立する感情か」という学習課題を設定し、これからの授業を進めていくことを確認した。私としては結論がどちらに落ち着こうと問題ではない。今回の授業において大切なのは、学習者にこのようなしつかりとした読解の目的を持たせて漢文に関わらせることなのである。

II 展開Ⅰ(全体学習)段階

基本学習としての『刎頸の交』の読解である。指導目標としては、

- ①この文章における友情はどのようなものであるか、利害の観点を含めて読み取らせる。
- ②句法に注意しながら、内容を正確に読み取る力を身に付けさせる。
- ③漢文の読み方・味わい方を身に付けさせる。

という三点に絞った。

まず音読である。ただ漫然と読ませるだけでは学習者も意欲を抱かないだろうから、今回は時間を決め、その間に二回読むというゲーム的な要素を取り入れた。

音読が終了した段階で句法の整理を行った。ここで取り立てて指導することは先程の「基本的な考え方」で述べた内容と矛盾するように思われるかもしれないが、今回は読みを句法の指導で中断させることなく、知識としての句法をスムーズに読解につなげ、句法学習の必要性を認識させることを目的とした。したがってこの段階では、指導者が解説した句法が本文のどこにあるかをチェックさせるのみで通釈の確認は行わない。そして読解作業の中では句法解説は行わず、チェックした部分も他の部分と同じように通釈させる、という方法をとった。なお、この際に用いた学習プリントが【資料1】である。

そしていよいよ内容読解に入る。学習者に通釈させなが

ら、難解な箇所は指導者が積極的にアドバイスを与えた。

登場人物の発言が終了することに、発言の意図とそこにかがえる心理・感情をまとめさせた。その際使用したプリントが「資料2」である。

そしてこの学習の最終段階として、この作品における友情をまとめるのであるが、学習者の意見は次のような内容であった。

B 二人とも国の存亡という共通の利益のために結びついた友情であり、自分の感情を捨てているところも共通する。この点が害である。つまり完全に利害の一致した友情と言える。

C 相如も廉頗も国のために自分の恨みを捨てており、結局は自分には何の利益もない。それでも信頼しあつて歴史に名を残すのだから素晴らしい。この友情には利害は全く関係していない。

D 国のために私情を捨てるのだから、害はあつても利益は存在しない。現在ではこのような関係は成り立たない特別なもの。本当に友情と言つていいのかわからない。

ポイントは「利害」という観点のとらえ方である。言葉の持つ深い含蓄性や物事を見る多角的な観点について考えさせる恰好の材料となつてくれた。

III 展開II(グループ別発展学習) 段階

全体を八グループに分け、担当作品を抽選で決定し、それぞれの作品における友情について分析させた。作品は、

『刎頸の交』と同じ史伝という観点から『管鮑の交』『水魚の交』、感情面での分析用に『漢詩(五首 生徒が「唐詩選」などから選び出したもの)』、論理的側面からの分析用に『論語』(使用する章段は生徒が選ぶ)、そして総合化の観点から『走れメロス』『友情』を準備した。

「学習の手引き」を二枚配布し、私も積極的に援助しながら考察を進めさせたが、展開Iで述べたように、各グループ内においても「利害」とらえ方が大きな問題となつたようであり、例えば『水魚の交』班において、孔明が劉備に従つた最初の動機は自ら出世するチャンスをうかがつていたからだ、と捉えた上で、劉備亡き後も国のために忠誠を尽くしたという事実を、ある生徒は「利害を超えた素晴らしい友情」と解し、別の生徒は「劉備に心底惚れたのだから、彼にとつては劉備の意志を継ぐことが何よりの喜びであり、喜びだからそれは利益である(最初と利益の内容が変わつた)」と述べている。(最終的には後者の意見にまとまつている)

なお、八グループのうち作品研究に当たらなかつた二グループについては、次の段階の討論担当グループとし、この段階では各作品の内容を把握させるために、各作品担当グループに分散させて参加させた。

IV 展開III(発表・討論段階)

発表・討論を通して研究成果を全体のものとし、主題について考える材料とさせることによつて、漢文学習の意義

を見出させようとする段階である。

ところが発表会に予定していた時間が突然の学校行事挿入（高校野球全校応援）のためにカットされるといふ事態が生じてしまった。学期末ゆえ余分な時間は一切無い。かと言って、指導目標から見てこの段階を削除するわけにはいかない。そこで、発表会と討論会をまとめることとし、発表担当者には、討論会の中である問題が生じた場合に作品研究の立場からコメントを加える、という役割を与えることにした。実際の討論では全員が規定時間を越える熱弁を披露し、主題と作品との関連づけはなされたと考えている。

討論は、第一時に設定した課題をそのままテーマとし、ディベートの方法を用いて行った。担当の二グループは非常に準備よく、すでに各グループの作品研究の成果も立論の中に折り込んで素晴らしい討論を展開してくれた。なお、ディベートの方法については四月当初に指導してあったので、生徒の中に戸惑いは無かったと思う。ただし一時間という時間設定は作品研究コメントが入った場合には余りにも少なすぎ、討論担当グループには申し訳ない時間となってしまう。

ちなみにこの討論では、精神的な充実も「利益」と主張し続け、すべての作品にこの精神的充実感が見られるとした利害一致側が、再び会える確証の無い「漢詩」の作者たちの去りゆく友に対する感情、「走れメロス」の「メロス」

と「セリモンテイス」の行動、ならびに物質的利害関係がからんだ場合の悲惨な出来事おもに「友情」の「杉子」をめぐる果ての友情の破局と関連付けて論じた無関係成立側を僅差で下した。

V まとめ段階

ここまでの学習をもとに、「友情」について深化・拡充した認識を定着させ、さらに社会建設へ資する認識にまで発展させるための表現学習である。もちろん、文章のなかに分析した作品内容を含ませることによって、漢文学習の意義を認識させることも目的としている。

次の生徒は、導入の際の定義段階では、友情はキレイ事に過ぎないと述べて友情を否定していた（一年次にある生徒をいじめたとして指導を受けた生徒でもある）。

E（孔明が劉備の死後も忠誠を尽くしたことを述べて）

友情は利害に関係なく成り立つものだということが言える。二人の間に友情が芽生えて、それから利益があったりたまには損したりするのだと思ってます。でも物質的に損しても、それが友情に対してプラスに働けば、二人の友情にはプラスになると思っています。だから、友達同士で何が利益になって何が損することなのかはお互いの価値観の問題なので、友情と利害はちつとも関係なしと言いたい。

友情という言葉の意味を本当に理解できるのは死ぬ直前だと思ふ。今はまだ私には理解できません。それに友

情についての定義は人それぞれだと思います。それなりの考え方をみんな持つていて、それぞれ違った価値観があり、だからこそ友情というものが出現し、そして成り立っていつているのだと思います。

決して優れた文章の例というわけではない。しかし、漢文という素材を通し内面の認識が大きく拡充した例として掲載した。漢文学習の意義の自覚にまでは至っていないが、このような作業を繰り返すうちに、その機会は訪れるものと確信している。

四・総括

研究協議においては、主に

- ・生徒の日常的思考との違和感の問題について、
- ・「総合化」の意義について
- ・漢文の授業であるとの自覚、必然性について、
- などのご意見、ご質問をいただいた。

漢文を読むときには、やはり「文学」として読み味わいたいと思う。「読む」という行為に伴う快楽を感じ、同時に「読む」ことを通し、そこに描かれた人間の生き様を疑似的に体験することによって己の人生を豊かにする、そのようなひとときをしたい。この「擬似的体験」による人間的成長面を重視するならば、日常的な思考場面との格差はあって然るべきものであると考える。ただ学習者に対して

違和感を感じさせることは、学習の負担となるばかりでなく、漢文に対する親しみを感じさせ、意欲を持たせることが困難になるであろうことから避けなければならぬ。そのためにも、彼らの興味・関心に基づいた主題設定は必要とされるのである。また、文学として漢文を読み進める上では、最終的に言語的な差異は超越して、現代文や古文と結ばれるはずである。「総合化」はそれに基づく考え方である。ただし、私の意図としては、現在の授業時数不足をカバーできる（漢文の授業であっても現代文の力を伸ばせる）のではないか、という観点も含んでいる。今回の実践においてはこの面は成果として現われてはいないが、可能性を感じ、今後も試みを続けていきたい。

「これは漢文の授業ではなくてもできるのではないか」というご意見に対しては、確かにご指摘の通りである。しかし、漢文を文学として読ませ、学習の意欲を持たせたいという願いから、「漢文でもできるから」このテーマで試みたとご理解いただきたい。ただし、長谷川教授のご講評でもご指摘を受けたように「漢文でなければ教えられない」指導内容は薄かったと反省している。

以上、今回の提案について述べてきた。現在はセンター試験直前ということもあり演習中心の授業となっている。八月に提案した舌の根の乾かぬうちに、「解答番号3は5が正解だ、使役形も覚えていないのか」などと言っている自

分に自己嫌悪を感じつつも、「仕方ないのかなあ」というあきらめと、「今に見ておれ」というフアイトを抱きながら、
 結稿とする。

(鹿児島県立出水高等学校)

【資料1】 句法学習プリント (完成させてノートに貼らせる)

・句法学習プリント

・況()乎

書き下し()

読み()

意味()

通常、「A且B」(Aすら且つB AでさえBだ)とセットで用いられる。「抑揚形」という句法の一つ。

★「漢文の鉄人」養成講座

・故且不能勝。況我乎。

【資料2】 心理・心情分析用プリント

◆第一段落における藤原の心情をまとめよう。

右のように考えた根拠となる表現

なぜその表現が、先の心情につながるのかと言うと、

--

三年六組 () 番 ()

